

あわいの視点 第2回名古屋芸術大学展 卒業・修了制作選抜+OB・OG展

2020年4月21日[火]—4月26日[日]
開館時間:10:00—18:00(金曜は—20:00)
休館日:会期中無休/入場無料
会場:愛知県美術館8階ギャラリー H・I室
主催:名古屋芸術大学

名古屋芸術大学は、中部地域唯一の私立総合芸術大学として、開学以来、教育研究活動を展開し、数多くの芸術家を育成するとともに、多様な芸術活動や社会実践等を通じて、芸術文化の展開に寄与してまいりました。昨年より「名古屋芸術大学展」をスタートさせ、創立50周年を迎える本年、第2回展を迎えることとなりました。

本展を開催する目的は、名古屋芸術大学の社会におけるアクティビティを最大限に開示することです。卒業・修了後、5年～10年を経て社会で活躍するようになった若手のアーティストやデザイナー、及び去る2月に本学キャンパスで開催された卒業・修了制作展において優秀な成績を修めた作品を一堂に集め、展覧するものです。

さて節目となる本年は、主となる表現領域に軸を持ちつつ、世代やジャンルを超え、あわいの視点で表現を追求するアートとデザインのOB・OG4名と10名の卒業・修了生によって構成されます。ひと、もの、こと、そして、色や空間の混ざりあうこれらの視点に、表現のあわいを見ることとなるでしょう。私たちが生きる時代においては、複合的などちらともつかない複数の視点から新たな領域を模索することが必要であると言えます。

一方で、芸術大学を卒業・修了した後も社会にその能力を認知され、人々に親しまれるようになるまでには自ら多くの研鑽を積む必要があります。クリエーターとしての本領は在学中の努力に加え、大学を巣立った後の持続によって得られるものかも知れません。本学では、このようなOB・OGの活躍を支えていきたいと考えております。

今後の社会を担っていくアート・デザインの若い開拓者たちの成果を心ゆくまでご覧ください。

学長 竹本義明



名古屋芸術大学開学50周年記念展覧会 「Future and Past」

2020年10月25日[日]—11月15日[日]
開館時間:月—金12:15—18:00、土日10:00—18:00
休館日:会期中無休/入場無料
会場・主催:名古屋芸術大学アート&デザインセンター

名古屋芸術大学は今年開学50周年を迎えることになりました。これを記念して、本学では様々なイベントが開催されます。

西キャンパスでは美術領域、デザイン領域の合同企画として、卒業生を中心とした展覧会「Future and Past」を開催致します。

本学は開学から50年という長い歳月を経て、沢山の卒業生が社会で大きな活躍を遂げています。この度、本学を卒業した美術・デザインの各分野から50名を選出して、その活動や作品を紹介する企画展を開催いたします。そして展覧会を通して開学50周年の歩みを振り返るとともに、本学の「今」と「これから」を感じたいと思います。

西キャンパス50周年企画運営委員会



編集後記

今年度より名古屋芸術大学アート&デザインセンターで働かせていただく事になりました。市川と申します。

私は本学の卒業生で、この度ご縁があり大学に戻って参りました。卒業してから5年以上経ちますが、本学の独特の雰囲気(良い意味です)に懐かしさを感じ、キャンパスライフを送るこの頃です。食堂のメニューも昔に比べて数が増えたり減ったりしています。オムライスなんかはライブパフォーマンスで作ってくれますし、学食のクオリティの向上を実感しました。

私が学生の頃から好きだったカニソナ丼もご健在で(私がちょうど2年生くらいの時に新しく登場したメニューだった気がします)思い出の味との再会に感謝しております。

食べ物の話ばかりになりましたが、これまでの培った経験を生かして動いていきたいと思っております。Bleが皆様引き続きご愛読される機関誌として更にブラッシュアップして参りますので、よろしくお願ひします。

市川 岳志(アート&デザインセンター)



最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄大山線(地下鉄有楽町線乗り入れ)徳重-名古屋芸術大学下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行-一乗電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換え下車していただく
中部国際空港からも名鉄大山線をご利用ください
西春駅から北約2,200m徒歩25分、西春駅からタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分



いわゆる「芸術大学」や「美術大学」に学ぶ学生は、卒業後どこへ行くのでしょうか。作家として引き続き活動を行う人、会社に勤めながら作品制作を続ける人、制作から離れたまったく別の道に進む人、実にさまざまです。

そんな中、大学で学んだ知識を活かした職業に就きながら作家活動も行う人々があります。

今回は、「色とマチエールの表現」を追求するラボであると同時に、アカデミー、ミュージアム、ショップの機能を備えた複合クリエイティブ機関「PIGMENT TOKYO」を運営する寺田倉庫スペースコンテンツグループPIGMENTチームリーダーの宣さりいさんと、店主であり、アーティストとしても活動する能條雅由さんにお話を伺いました。

—日本の伝統的な画材を主とした施設と感じましたが、お店の成り立ちや始めようとしたきっかけは何でしたか？

宣さん
(以下敬称略)

保存保管事業を主とする寺田倉庫株式会社が母体となっています。寺田倉庫はワイン、アート、映像フィルムなど、各商材に適した温湿度管理による保管と、倉庫業の枠を超えた新規事業を展開する会社で、今年で創業70周年を迎えます。1975年から美術品と貴重品の保管事業を開始しているのですが、作品を長期保管していくと少なからず劣化が生じるため、よりよい状態を保つための付加サービスとして修理・修復を提供しています。

そうするうち、修復に使われる画材や技術を伝承する老舗の後継者不足が課題となっていることに気づき、画材を販売するだけでなくその使い方や成り立ち、そして歴史を長く伝えるため、素材を生かすショップ兼ラボとして『PIGMENT TOKYO』がオープンしました。日本画の画材だけでなく西洋の画材も取り扱っています。

店舗内装は竹の藪をモチーフとしており、スタッフの制服はラボということでワークウェアをイメージしています。オリジナルの手染め生地デニムを用いてヴィンテージ感を出しています。

—お店を訪れるお客様はどのような方でしょうか？

宣

国内外問わず、多くの方に越えたいと思っています。もちろんアーティスト、メイク関係、ファッション関係の方も多いですね。絵に関わる人だけではありません。

—伝統的な画材を扱われていますが、古いものの継承が難しくなっている中で、伝統的なものの良さ、重要性を伝えていくにあたりどのような取り組みをされていますか？

宣

販売だけでなくワークショップや各種イベントを開催することで、国内外の方に技法を伝えています。また、異分野で活躍するエキスパートとのトークイベントなど、ジャンルを問わず多くの方にアプローチする取り組みを行っています。ワークショップは月に15～20回開催しており、美術系大学を卒業したPIGMENTスタッフが講師をしています。入門編や初級編は初心者の方も体験しやすい内容で、テンペラ画や石膏、岩絵具などいろいろな画材の使い方を学ぶことができます。なかなか個人では始められないですね。

PIGMENTではこれを通して、画材や道具の良さを広め、ほかの業界の方にも興味を持っていただくことに力を入れています。絵画材料に詳しくない方にも来ていただけるような店舗作りを目指して、従来の絵を描く人だけが訪れる画材店とは一線を画す面を出していけたらと思っています。



—こちらでは美術系大学を卒業した方々が多く働いているそうですね。以前テレビ番組で『PIGMENT TOKYO』様がアーティストの支援を行っている特集を拝見しましたが、どのような支援活動をされていますか？

宣

働いているスタッフのほとんどが美大出身でアーティスト活動をしています。PIGMENTでは、作家活動のみでは体験することのできない接客、マーケティング、運営や企画に関わってもらい、事業運営に携わることで各々が学べるものがあると思っています。お客様とのつながりもそれぞれの作家活動に生かすことができれば成長につながるのではないかなと思います。



Open 12:15—18:00(最終日は17:00まで)日曜休館 **入場無料** どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。大行事のため、日曜以外も休館する場合があります。

- 5/ 9 [日] → 5/10 [月] 『子どもデザインだいがく』展
- 5/16 [日] → 5/17 [月] 『子どもデザインだいがく』展
- 5/22 [日] → 5/27 [月] LIFE(仮)/〇〇のむこう側(仮)
- 5/29 [日] → 6/ 3 [月] 近藤憲男油彩画展/にわにはにわ
- 6/ 5 [日] → 6/10 [月] From Denmark 2020展
- 6/12 [日] → 6/17 [月] 教員展
- 6/26 [日] → 7/ 1 [月] プレソツ展
- 7/ 3 [日] → 7/ 8 [月] K109版画作品展
- 7/10 [日] → 7/15 [月] スペースデザインコース展/前期交換留学生作品展/コミュニケーションデザイン&アート大学院講習展
- 7/17 [日] → 7/22 [月] CONNEXT 2020 陶・ガラス教育機関講評交流展
- 7/24 [日] → 7/29 [月] 素材展(テキスタイルデザインコース)
- 7/31 [日] → 8/ 5 [月] 素材展(メタル&ジュエリーデザインコース)

卒業後、芸大生はどこへ行くのか？



—アーティストとして生活することに不安を感じる学生に対して、どのように向き合っていくべきかメッセージがあれば教えてください。

能條 そんなに固く考えすぎないほうがいいのでは。作品だけで生きていけるようになるのは、すぐにはいきません。今の時代、いろいろな選択肢がありますよね。直接作品を見に来てもらわなくても、SNSで発信もできますし、インターネットを通じていろんな人とコンタクトを取ることができます。それがどこか別のかたちで誰かの目に留まったり、これまで仕事ではなかったことが思いがけず仕事になったりするかもしれません。どこにチャンスがあるかわからないし、自分が意図しているところでヒットするかもわからない。思いがけないところかもしれない。デザイナーからアーティストになる人もいますし、ファインアート出身じゃないからアーティストになれないということはないと思います。クリエイティブの根幹がどこにあるか？それを自分の中で持ち続けることが大事なのかな。

能條 大学はある種守られた場所ですし、それが卒業と同時に突然外に出ることになるので、何をどうしたらよいかもわからなくなってしまいます。テクニカルな部分は教えてもらっても、アーティストになる方法は誰も教えてくれない。目の前の課題をこなすことで精いっぱい毎日の中、アーティストになるということが抽象的でプロセスが見えない。アーティストと名乗るにもいろいろなパターンがあるので、自分のスタイルや個性、魅力をいかに見つけるかが大切ではないでしょうか。ロールモデルがないわけでもないですが、それも時代によってどんどん変わっていきます。自分のやりたい世界観を探し求めている方が、一層クリエイティブなものにつながるかも。この先の人生はこれまで学んできたことよりも知らないことの方が圧倒的に多いので、そこに足を踏み入れたとき自分がどう思うか、感じるかが試される気がします。

—宣さん、能條さん、ありがとうございました。

大学卒業後に学んだことを活かせる仕事とは作家活動以外に思いつかない学生も多いのではないのでしょうか。最近では絵画と建築やファッション、音楽等のコラボレーションなど、アーティストが多面で活躍できるステージが増えてきています。自分の強みを活かせるのはどの分野か？「作家」「アーティスト」といった固定観念から一度離れてみるのも良いかもしれません。



PIGMENT TOKYO
東京都品川区東品川2-5-5 TERRADA HarborOne Bldg 1F
電話番号: 03-5781-9550
営業時間: 11:30 - 19:00 (月曜・木曜休) <https://pigment.tokyo>



—では、ここからは作家活動も行っている能條さんにお話を伺いたと思います。こちらのお店で働くきっかけは何でしたか？

能條さん (以下敬称略) ショップの立ち上げから関わっています。京都造形芸術大学大学院を修了するタイミングで立ち上げの話があり、ゼミの先生のつながりもありご縁をいただいて今に至ります。他のスタッフは関東近辺の美大卒業生が多く、参加の経緯も紹介、面接などさまざまです。また、現在もなにかしらクリエイティブなことに携わっています。店舗内にはスタッフの作品も展示しており、PRも兼ねています。

—PIGMENTで働くことで自身の役に立った事、よかった事を教えてください。

能條 アーティスト活動をしていくにあたり、ショップ運営に関わることで、大学では学べないことを知ることができました。アーティストは作品を作ることに注力してしまいがちですが、それだけの過程では得られない考え方が学べると思えます。まず収益、マネジメント、コマーシャルといった点です。ひとつの事業としてかたちになり、成功体験につながるものが自らに還元され、作家として自分をどのようにマネジメント、プロデュースしていけばよいか考えるようになりました。また世界中からお客様が来られるので、スタッフも接客を通じて語学力を身につけるようになっていきます。自身の作品を説明するうえで、語学力があると活動の場を広げていくことができます。アーティストだから口下手とはもう言っていられない時代、伝達力やプレゼン能力は必須です。コミュニケーション能力を磨くことができるのも接客業の良い面ですね。



Report

1

目で見える名曲集-GORO NOGUCHI GOLDEN HIT PARADE-
その展示会の意味と効力

2019年8月29日[木] - 10月14日[月]

名古屋芸術大学開学50周年記念事業として何を行おうかと思案していた時、アトリエで流している音楽が何故かいつもと違ったように感じられる時がありました。音が頭の中で具体的な形になろうとしているような感覚です。この感覚をもう少し具現化していき、私たちの耳を楽ませてくれる音楽を軸に置いて展示会企画が出来ないだろうか。私は早速この着想を美濃市にある美濃和紙の里会館に持ちかけてみることにしました。

うだつの上がる古い町並みが美しい美濃市は日本でも有数の和紙の産地です。この和紙の魅力を生かしながら制作するという条件設定をして、曲のタイトルや歌詞、メロディーからイメージした作品を描く事になったのですが、この時私の脳裏に一人のアーティストの姿が浮かんだのです。

野口五郎さん

私は学生の頃から同郷のスターである野口さんをブラウン管で拝見しながら憧れを持って過ごしてきました。このかたの数々のヒット曲を本校教員、卒業生在学中で絵画作品にしよう。方向性が確定した瞬間でした。

共通の知人と、会場である和紙の里会館を通じて野口さんとそのオフィスの皆さんに、この企画内容をお伝えし、ご協力頂けるか打診をしたところ、フィールドは違えど、文化に携わる同胞意識を持っていただいたからでしょうか、全面的なお力添えの返答を頂きました。

41名が一曲ずつ、各自の個性を生かしたスタイルで作品に仕立て上げていくという内容書を作家に送り、動き始めた展示会は、ポスター制作や会場デザイン、物販に至るまで共通認識された美意識で統一されながら徐々に形作られていく過程で、全国的美術誌やTV局からの取材もあり、盛り上がりを見せていったのです。

高評判に背中を押され遂に始まった展示会は、入場者数も予想された数字を上回り展示作品の評判も高いもので、関係者は皆胸を撫で下ろしました。会期中のギャラリートーク当日は、野口さんのファンの皆さんや美術ファン、大学からの観覧希望者など他ジャンル融合型展示会ならではの顔ぶれで500人を超える賑わいの中、武藤美濃市長、川村本学理事長のご挨拶の後、野口さんとふたりで全作解説をさせていただきました。その日受けた多くの取材が、結果展示会を更に勢い付けたようです。



様々な画風を主張しながら壁面に並ぶ日本画作品達、会場空間中央部にはこちらでもまた和紙の特質を生かした立体作品3体が並びました。この和紙による立体は、松岡先生をはじめとするアートクリエイターコースの皆さんがそれぞれ全く異なったアプローチで各曲からの着想を形態化してくれたものです。会場入り口には記念撮影コーナーや年表、数々の輝かしいトロフィーなどで野口さんの足跡を辿り楽しむこともできました。会場に流れる野口さんの名曲を聴きながらアート作品を視覚的に楽しむ。その作品は全て美濃和紙の素材としての強さや美しさで共存し、成立している。単独であっても十分に魅力的な3つの要素がこの企画によって出会い沢山の方々の目や耳を楽ませることが出来たのは、主催していただいた美濃市、多忙なスケジュールの中全面的なご協力をいただいた野口五郎さんとそのスタッフの皆さま、その他多くの方のご尽力と作家の制作に対する熱意があつたものであったと思います。

今回の展示会では、表現形式の枠を超えることや地域文化と交流することの中に、今後の新しい可能性を見つけた気がします。社会に関わり芸術活動を展開していく一つの方法を提示できたのではないのでしょうか。鮮度の高い発表形態を今後も考えていきたいと思えます。

美術領域 日本画コース教授 長谷川喜久

Report

2

泉太郎「スロースターター バイ セルフガイダンス」

2019年10月26日[土] - 11月12日[火]

本展示会を見終わった時、金沢21世紀美術館での展示の延長、あるいは拡張、はたまた別バージョンのように感じました。金沢では2017年10月から2018年3月にかけて「泉太郎 突然の子供」という展示会を開催しました。準備期間を含め約7ヶ月間、担当者である筆者は随分と長い時間をかけて泉さんとの対話を繰り返しました。その対話の中でいくつか重要なポイントとして挙がったのが次のような内容でした。「見えているもの、そうだと感じている物事を疑う」「裏側、周辺、背景について考える」「主役ではなく脇役」「待機状態」「言葉と意味、伝達」。

今回の展示会でもこれらは全て考え抜かれ展示に落とし込まれていました。例えば、一番奥の広い部屋で展示されていた白い壁が立ち並ぶ作品。一見、何も起きていない白い壁です。でも裏側へ回ると、その壁の裏で過ごしていた学生達の姿が映像に映し出され、また時間を費やした証とも言える空き缶やペットボトルが置かれていました。「何も起きていない、何も無い」と判断した直後に「何か起きていた」という真逆の解釈に代わります。私達が見えているものと事実はどうやら随分と異なるようです。

動画は言葉や絵画や写真よりもより正確にその場面を記録できる媒体だと私達は信じていますが、泉さんは映像そのものを疑っています。泉さんは映像を扱う作家ですが、映像作家ではありません。ビデオカメラで撮れない出来事も含め、映像について考えている作家と言えいいのでしょうか。



使用済み扉 / 立て掛け画板

映像の問題と同じくらい泉さんは言葉の曖昧さ不確かさについても自覚的です。今回それを見せたのがおそらくアルバイトパフォーマーの作品だと思えます。金沢では実はこの言葉の問題を主題とした作品は未完の状態でした。継続プロジェクトとして密かに進めているところでも。

泉さんの展示を見るというも感じることもありますが、展示会の空間で泉さん本人の気配を感じることで。まさに、いないのにいるような、見えていないけど見えるような。それが泉太郎という作家の展示会なのだと思えます。

金沢21世紀美術館 キュレーター 野中祐美子

芸術一話

ART WORDS
FROM THE
ART WORLD

27



野焼き風景(焼かれるのを待つ作品たち)

第27話 なつかしさをめぐって

なつかしいという感覚はどこからやってくるのだろうか。空を見上げる。神社で手を合わせる。飼っていた犬の面影がよぎる。ふとしたときになつかしきはやってくる。

はじめて聴いた音楽なのになつかしいと思うことがある。ある人のうたを聴いたとき、まるで遠い旅に出て、帰ってきたかのような感じがした。世界がまだ名付けられていない原初感覚にふれた気がして、なつかしさに包まれた。誰もこどもの頃はそんな感覚を生きていたのかもしれない。

土をこねてやきものをつくるとき、野焼きするときにあられる様々なこと一色、形、音、熱、匂い、手ざわり、汗一にからだを満たされるとき、自分はたしかに生きているのだという手応えとともに、どこかなつかしいのはなぜだろう。自他の区別もおぼろげな時代に、夢中になって遊んでいたという記憶はもう辿ることができないが、まだからだのどこかに残っているのかもしれない。先日ある展示会で多くの作品を見た人が「幼児性を失わずに大人になった人になつかしく

ない形。思わず抱きたくなる」という感想をくれたことを思い出した。なつかしいという感覚の根源には、普段は思い出すことのない、途方もない時間と空間が流れているようだ。それは個人の感覚を超えてあらゆる人と共有できる深みと広がりのある世界なのだと思えます。ものをつくるということは、つくることによってしかあられない未知の私に出会い、その背後に流れる大きな世界につながるという行為なのかもしれない。